

中世文書を読む(九)

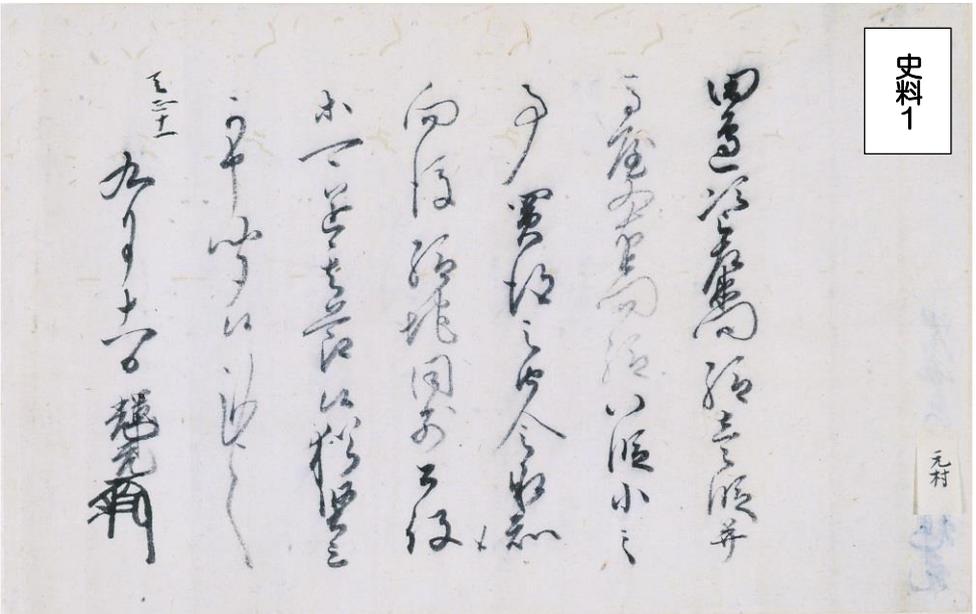
もうりてるもと

毛利輝元の手紙



これは、戦国大名の毛利輝元が出した手紙です。
 この展覧では、
 文書を読み解く過程を紹介し、
 謎解きの楽しさを
 みなさんにお分かち合いたいと思います。
 ぜひ読んでほしいですね。

史料1



①

史料1を今の言葉に直すと、次のようになります。

毛利輝元が、天正11年(1583)に
かしん ことまじひひかひかひのこまじ
 家臣の児玉四郎兵衛尉に宛てた手紙です。



(端裏書)

「墨引」

児玉四郎兵衛尉

輝元

(付け紙)

元光

田邊次郎左衛門尉の給地の一段と

馬屋又右衛門尉の給地の八段小

を、おまえが買ったとのこと、承知した。

今後はおまえが給地と同様に(買った土地の)公役(税)

なごを務めよ。なお、(詳しくは)堅田三郎左衛門尉

が申し聞かせたことなり。謹言。

天正十一年(一五八三)

九月十一日

輝元(花押)

戦国時代の児玉さん家の父子関係



② 毛利輝元は、戦国大名よね。児玉四郎兵衛尉は、これまでの『中世文書を読む』に出てきた児玉元村のことじゃね。田邊さんと馬屋さんは、何者なん？



③ それが、分からないとダメよ。田邊さん・馬屋さん「聞かぬは聞かぬが、他に聞ひかひらぬは...」



④ 前回習った『毛利氏八箇国御時代分限帳』にも載っていないの？



※『毛利氏八箇国御時代分限帳』とは... 天正15〜20年(1587〜92)頃 毛利氏が全領国規模で行った「惣国検地」の結果をまとめた帳簿

⑤ 馬屋という名字は全然載ってなく、田邊は「与三次郎」ほか5名の名前が記載されていますが、「次郎左衛門尉」は載っていません。「与三次郎」たちが「次郎左衛門尉」の子孫かもしれないけどね。それ、今回は「給地」を買った児玉さんについて書きます。

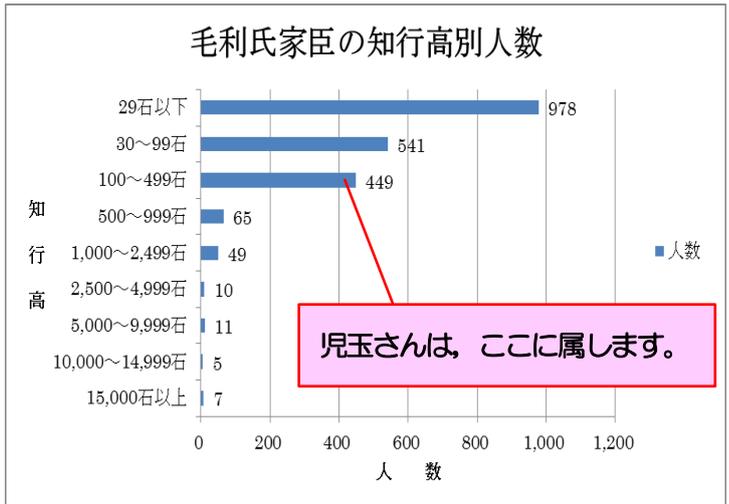
⑥ これまでの『中世文書を読む』で、児玉さんは、
○ 天正12年(1584)頃、安芸国のほか、周防国・長門国にも給地を持っていた。
○ 惣国検地の後、安芸国のほか、備後国・周防国・出雲国の所々に、合計452石余の給地を持っていた。
○ 天正14年(1586)、「山口も」を買得た。
などのことを学んだよ。



⑦ そついでに、452石余の知行高ってそんなに大きくないんじゃないかね。知行高の小さい児玉さんが、あつたの「給地」を、なぜ、買ったの？



⑧ いろいろに気が付いたね！確かに、「土地を買った」のは、お金が必要です。知行高のそれほど大きくない児玉さんが、土地を買ったのは、お金のついでに出したの？



⑩ また、康徳元年（1309）3月、室町将軍の足利義満の一行は、安芸国の厳島神社にお参りした後、筑紫国平戸に向かおうとしますが、途中、「たぐ松」「しほの」「しほの」（注）に停泊します。



⑪ ななはな！
下松は、瀬戸内海の
主要な寄港地の一つだったのね。

⑫ そのころ、戦国時代には「下松浦」に接して「下松東市」・「下松中市」・「下松西市」がありました。
また、北側約3kmにある山陽道沿いには、「久保市」・「岡市」・「花岡市」・「久米市」・「遠石市」などの市町が点在していました。
下松周辺は、海陸の交通路の結節点！
それゆえ多くの市町が成り立ち、経済活動が活発に行われていたと推測されます。



⑬ 児玉氏は、末武の花岡八幡宮（地蔵院）からのお蔵尊お祈念のお札などを毛利氏に取り次いでいます。
また、地蔵院の住持職の任命に当たって、毛利氏の奉行人をリードして地蔵院の希望をかなえています。
前出の表の「わらの」の「わら」が、
児玉氏が代官を務める地域は、北は花岡市のあなほのりから、南は下松浦の辺りまで広がる、下松平野一帯であったと考えられます。

蔵書の御挨拶として巻数※と折箱が届けました。
ありがとうございます。
なお、詳しくは「**児玉五郎平衛門（五郎）**」が申します。
おそれながら謹んで申し上げます。
十二月十七日 輝元（花押）
地蔵院

※ 巻数：読んで祈ったお経の名前も回数も記した文書

⑭ 人家が集まり、経済活動が活発な下松では

- 屋敷の間口に賦課する屋敷銭
- 市に住む商職人の営業に対する課税
- 港に出入する商品への課税
- 港に出入する船への課税

などなど、様々な税が徴収されたと思われています。
この約1/3が
児玉さんの収入となったのなら
児玉さんは他の家臣の給地や
たぐさを買取の収入に比べてかなり多い。